
幸せを運ぶひと。 ---Happy Carry Girl is Lucky---

時雨刻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幸せを運ぶひと。 - - - Happy Carry Girl i

S - L u c k y - - -

【ZPDF】

N4382A

【作者名】

時雨刻

【あらすじ】

サンタクロースは、クリスマスイブの夜の姿。それ以外の日、サンタは皆に幸せを運ぶハッピーキャリーになる

しかくいそら。 - - - Sky Is Blue

見上げれば空は広く、どこまでも続く。

それが当たり前で、普通の空。

だけど俺が見る空は、いつだって四角く区切られているんだ。

それが俺にとって普通の空だから。

しかくいそら。 - - - Sky Is Blue

いきなり、目の前に現れた少女を見て、堅は特に驚くわけでもなく、むしろ最初からわかつていたとでもいうように声をかけた。

「確か、前も来たよな。えっと……誰だっけ？」

「……前に君のところに現れたのは君を励まそうとしたから。……無駄だつたみたいだから、消えたのだけれど……たぶん、そつ……無駄なことなんて何もないってこと、気がついていなかつた。ごめんなさい。今日は、仕事で来たの。君のところに訪れるけどが私の仕事だから」

「けつたいな仕事だな……。ま、いいけどさ。つーかお前の言つてる意味がよくわかんねえ。誰なんだつて聞いてんだけど、俺」「名乗る名前が、私はないの……だつて、必要のないものだから。名乗る必要もないし、聞かれる必要もない。……敢えて言つのなら、サンタクロース。でもそれはクリスマスイブの話。その日以外は、私達はこうして誰かを訪れるのが仕事。」あらが本業なの。でも、

そんなことはどうでもいいの。だって私は 幸運だから。君に訪れた幸運。それだけは確か」

淡々と、透き通った声で少女は答える。
いきなり入ってきて、ふざけたことを言つもんだと、笑いたくなつた。怒るわけでもなく自分の不運を嘆くわけでもなく、ただ笑いたくなつた。

自分に訪れた幸運などと。

あるはずがないのに。

幸運が、訪れるはずがない。

ましてや、人の姿で。

幸運に、形があるとして、人の姿などは想像すらしたことがない。

嘘にしては、あまりに滑稽で。

真実にしても、あまりに幻めている。

ふと口許を緩めて、少女を見つめる。ひどく美しい少女を。

「もうすぐ死んじまう不運な俺をからかいにでも来たつてわけか?
サンタクロース…いや、幸運さん、か」

「さあね。君がそう思うならそれでいいし、あるいは本当にその
のかも。真実なんて誰にもわからないから。ただ、からかい目的だ
としても、幸運をもたらすのとしても、私は君のところに訪れた。
これだけは変えがたい真実」

その言葉の意味を考えながら何も言えないでいる堅に、少女は続
ける。

淡々と。

「君が不運だと思うから、それがたとえ幸運であつても不運になつ
てしまつ。不幸も、幸せだと思えば幸せなのと同じこと。他人か

ら見て、それが不幸だつたとしてもね。でも君が不運だと思つてことは やつぱり、不運なのがもしけない

「何が言いたいんだよ」

「言つたでしよう？ 私は君に訪れた幸運だつて

にこりと綺麗に微笑む少女。

「必ずしも死ぬことが不運だとは限らない。君にとつて、不幸せなことであつてもね。死ななくても、生きていても、不運は訪れる。幸せじゃないって、生きていても感じる人はたくさんいるでしょう？死ぬことが不運じゃないなら、君の不運は何？」

「俺の……」

不運？

わからねえ。

死ぬこと以外に、不運なことがあるのか？
まだまだこれからだつてのに。

皆と喋つたりしてさ。

何でだ。

何で俺なんだよ。

考えたこともなかつたのに。
自分が死ぬなんてさ。

……死ぬ？

何でだ？

何で死ぬんだ？

何で、俺は 死ななきやいけない？

「病氣……だから……」

堅がぽつりとつぶやいた。風にさらわれて消えてしまいそうに小さ

かつたけれど、少女はしつかうとその声をとりえて、口元に微笑む。

「そう、病気。君は病気だから死んでしまう。病気になつたことが君の不運」

「だつて、これは……いや……、だからどうしたんだよ。なつちまつたもんはしじうがねえだろ？それに……足搔いたつて治るもんじやない。足搔くことなんか、散々やつた」

「それ」

少女が一言だけ呟いたのだけれど、何のことを言つて居るのかわからず堅は話すのをやめてきよとと少女を見た。

「その諦めの気持ち。……それじゃ、治りなこのもも無理なことじやない？」

「は？」

「氣の持ちよひ、つて言つでしょ？あれつて間違つてないと御つよ。言靈つて言つて、言葉には力があるの。言つたことが本当になるつていつも、そのせい。だから弱音ばかり吐いてると、体も弱つていぐ

「だつたらどうしようつて言つただよつー」

堅がはじけたように叫んだけれど、少女は別に驚いた様子もなくただ無表情に彼を見つめていた。

「最初は、すぐ元気になるつて思つてた。絶対治してやる、つて……でも駄目なんだ。体はどんどん弱つてくんだよ！俺がどんなに祈つても……逆らえないんだ……つーべつしらつて言つんだよ……」「さあ。どうするかを決めるのは、私じゃないから。……決めなきゃこけなこのは、君でしょ？」

冷たい返事を落として、少女は真っ直ぐに堅を見た。魂が抜けてしまつたよつただつむこでいる堅は、ただね、と言葉を続ける。

「忘れないで。私は幸運。君に訪れたの。君は、どうしたい？」
「……生きたい……」

ぱつり、と。

力無く、弱々しく発された言葉だけれど。

少女は満足そうに微笑んで、堅が何か言つのを待つた。

「……生きたいんだ。死ぬとわかつていても、わかつてているから、どうしようもなく生きたい。今日が終わつて、また明日が来て、学校行つて。堅が普通だつて思つてることを普通にやりたいんだ……つ、でも無理なんだよ……」
「だから、諦めちゃ駄目だつて言つてるの。私は君の何？」

はつとしたよつて、堅は顔をあげた。わずかな希望を瞳に映して、少女を見つめる。

「俺に訪れた……幸、運……？」

言いながら、堅の顔に光が芽生えた。
少女はそれに応えるよつてこつと微笑む。

「そういうこと。信じる信じないは、君の勝手だけど。いつも仕事だから、君が信じようが信じまいが幸せをあげなくせやいけないの」

そう言って、少女は持っていた袋を開いた。

ふわりと、暖かい光が堅を包む。優しい気分になれる気がした。

「かわりに君の悪いところ 病気をもらひていくな

窓から日も開けていられないほど風が強く吹いた。その暴風の中、消えることなく声が響く。

「幸運は、いつも君の傍にいる。忘れないで」

不意に風が止んで、堅はそつと窓を開けた。
そこには誰もいなくて。少女の残像さえも残つていなかつた。
ただ、体の中が妙に軽くて。
治つたのだと、自分でわかつた。

「……いつも傍に、か

聞こえているのだろうか。
俺の声が。

「ありがとな、幸せを運ぶひと」

堅はそつと、一言呟いた。

そうしたら、堅の頬を風がなでて。

堅は、ゆっくりと窓を開じて、そして笑顔を浮かべ、久々にベッドから降りると窓へ近付いて空を見た。

ベッドの上にいたとき、窓から見る空はいつも四角くて、それが自分にはすべてなのだと思つていた。

雲がぱらぱらと散りばめられた空は、どこまでも続いていた。

探し物と落とし物。 I am a lovesick girl.

空が震んで、吐く息が白い。街はクリスマス・ソングに溢れている。女子高生になつて三年目。

つまり三年生の冬を迎えた千流は、色彩に富んだ街とは裏腹な気分で、道端に落ちてる石を蹴ると溜め息を吐いた。

だって、わかんないんだもん。

進路進路つてや。

そんなこと、簡単に決まるわけないじゃん。

簡単に決められたら、悩まないつーの。

探し物と落とし物。 I am a lovesick girl
1.

もう暗くなつてもいい時間のはずなのに、街は音と人と光で溢れていた。

もしかしたら、昼間よりも賑やかかもしれない、クリスマスイブの夜。

「なあにがジングルベルだ、ぶあーかつ

有線のラジオまでもがクリスマス・ソングを流している。その曲を右から左へと聞き流しながら、千流は店のショウウイングウェーブをやり、毒づいた。

飾つてあるのは、洋服。何とかつて賞をとつたデザイナーがデザインしたやつ。書いてある値段をちらりと見たけど、高校生に手の届

く数字ではもちろんない。

それを見て、千流は更に深い溜め息を吐いた。

「デザイナーねえ……」

内心、憧れているけれど。

高校生にもなれば、憧れと現実は全く違うものだと、わかっている。だから、口にはしない。

51

眩しい光を反射しているショウウインドウのガラスに額をあてて、もう一度溜め息を吐く。

「隠ね騒がせつかつこしてぬと、幸せが逃げるんだぞー…………つて…………かなきややつていらんないよ…………既に幸せなんかないし…………」「やつ騒がしてこぬのは、頗だけじやなこ?」

不意に、自分の呟きに返事が帰ってきて、千流は顔を上げると振り返った。

自分を見下ろすように一人の少女が浮いていて、千流はほとんど口ひ声に近い声を発した。

「うせむ」

……し、喋つた……」

空中に浮いている少女は赤いワンピースを着ていて、白くて大きな袋サンタクロースが持っているようなソレを手にしていた。膝辺りまであるがつぽりとしたブーツを履いて、桃色の長い髪をなびかせながらとても綺麗に笑う。

その姿は、冬にしてはこさか寒そうだつたけれど、少女から漏れる雰囲気は温かく、優しいものだつた。

「うん、喋るよ。だつて私は、君に訪れた幸運だから。……君にしか見えないけどね」

「……は？ 幸運……？」

「信じなくとも、いいけど。ただこれは私の仕事だから、君に伝えなくちゃいけないの。……君の不運」

「あたしの不運？ つて……そーいうこと、進路に悩む高校生に言うもんじゃないつしょ。ってか見てて寒そうなんだけど。何、あんた誰？」

少女は地面におりたつと、かすかに微笑んで千流を見た。比較的小さな千流と同じくらいの背丈。

むき出しの肩が何だか寒々としていて、見ている千流のほづが身震いをした。

「……人は私のことをサンタクロースと呼ぶけれど……。それはクリスマスイブの話。でも私が誰であろうと、今は君に訪れた幸運だから

「はいはい。幸運ね。サンタクロース……つて、今日イブじゃん」「プレゼントを配るのは、あくまでも夜のお仕事。皆が幸せになれるように、配るの。その口以外はこっちが本業」

「幸せを運ぶのが？……つて一かあたしそんなに不幸そ？？」

「少なくとも、世界で一番不運だつて顔はしてると思つけどっ。」

何の悪気もなくわうわう言つて笑うと、少女は千流の心臓の辺りをトンと指で突いた。

「答えは、いつもこのなか。君に出せない答えは、私にも出せない。

……はやく、答えを出して。本当の答え。後悔のない、君の真実。後悔に、飲み込まれたくなかったらね」

「何の、話よ？」

「さあね。わからないならそれでもいいけど。覚えていて、幸運は一度来ないうこと」

ふわりと浮いて、少女は高く高く舞い上がった。その姿が見えなくなるほどに。同時に、何か白い物 雪が、地上に降りてきた。

「何に……気付けってのよ」

クリスマスソング。悲しい主題歌。自分の声も、かき消された。

「はあ……何だかなあ……」

校長先生の長つたらしい終業式の挨拶を聞き終えて教室に戻った千流は、自分の席につくと窓の外をただじっと眺めていた。

そりやあ、デザイナーにはなりたいけど。

たぶん、もう大学とか願書の締切り終わってるだろうしなー。つてゆーか、まだ募集しても行きたいとこ決まってないし。

……まず、大学行くかさえ決めてないんだよな……。

はあ……留年しちゃおつかなー。……つて、アホかあたし……。

デザイナーねえ。…………デザイナー…………ねえ。

千流は心の中でぶつぶつ呟きながら机に頭を垂れた。

負のオーラを滲ませている千流のところに、友人が数人やってきて

彼女の頭を叩く。

「ちーるちーるー何へたれでんのっ?」

「……や、別に……」

「別について言うわりに、凄い鬱な顔してるよー? 何か悩みこと?」

「んー……まあ進路についてちょっとねー……」

やる気のなさそうな気の抜けた返事を返した千流に、心配そうな表情を見せて、そつかと呟く。

「でもそれは千流の問題だからねえ。……後悔しないようつこ、咎めるだけ悩みな。……時間、迫つてゐるやうだね」

「うん……」

それはわかってるんだけどね。

だから悩むんだよなー。

何したいんだろ、あたし。

* * *

いつもショウウインドウ。

気がついたら学校の帰りに毎日通りでいて、飾られている洋服に目をやっていた。

冬休みに入ったというのに浮かない気分でいるのは千流くらいのものだらう。

「ひさしひさ」

またあいつかっ!と思しながら声をかけられて振り返ったが、今度は人だと悟ってほつとする。

綺麗で、人のよさそうな、髪をアップにしてる女人。

こんなにちはと挨拶を返すと、女人人はショウウインドウの前に立つて、千流に近付いて、飾つてある服に手をやつた。

「気に入つた？」

「え？ええ、まあ、そうみたい……です。気がついたら毎日通つちやつてるし」

「ふふ。服が好き？」

唐突の質問に面食らいながらも、千流は服を見上げて眩しそうに手を細めた。

「はい、たぶん」

「この服ね、私がデザインしたものなのよ」

優しくそう言った女人を驚いた面持ちで見て、千流はおずおずと話を切り出した。

「……じゃあ、あなたがデザイナーの……奈緒さんですか？」

「はい、そうです」

おどけて返事を返した奈緒に微笑みを投げると、奈緒も微笑みを投げ返してきた。

「あなたの名前は？」

「千流です。矢島千流」

「そう、千流ちゃん。私のこと知つてることば……デザイナーに興味があるの？」

「……はい」

気の乗らない返事と暗い表情が帰つてきて、奈緒は不思議そうに首をかしげ、千流の手を取ると店の中へと引っ張つて行つた。暖かい色で統一された店の中には、色々な形や色の服が場所を取り合つていて、しかし互いに相手をひきたてあつていた。

「……凄い」

「どんな人が着てくれるんだろう、どんな人が喜んでくれるんだろう。……そう思つて『デザインする』のが、『デザイナー』の仕事よ。千流ちゃんなら、どんな服を『デザイン』する？」

「あたしは、」

目を輝かせながら店の中を見渡して、真っ直ぐに奈緒を見る。そして、ここりと笑顔を浮かべた。

「着ているだけで幸せが降つてくるんじゃないかなって、思えるような服を『デザイン』します」

「そ。じゃあ、頑張らないとね」

奈緒の笑顔をあとに店を出たとき、そこにはあの少女が立つていた。全身桃色と言つても過言ではない格好の少女。手には、何が入つているのかやつぱり大きな袋を持つて。

「迷いが、なくなつたんでしょう？」

「うん。あたし、『デザイナー』になるの。もうグダグダ言わない。卒業したら、この店に自分を売り込みに行くの」

「そう。君の不幸は、迷う心だったの。自分には決めたことが、夢があるのに、選択肢を増やして悩んでいたの。もう、その心は落として来ちゃつたみたいだけよね。でも、かわりに探していたもの見つけたんでしょう？それが君の幸せ」

「まあ……それが幸せかどうかはわかんないけどさ」

「いいえ。きっと幸せ。だつて私は、君に訪れた幸運だから」「そちらじいけどね。あんた、一体何をしてくれんの？」

おどけて肩をすくめた千流に、少女はにっこりと微笑むと袋の口を開いた。

「君の落とし物を、拾つて行くの。迷える心を。君がまた拾つてしまわないように」「元気」

「それはいいわね」

すう、と袋の中に風が入つて行つて。

少女は袋を閉じた。

千流は少女に向かつて、明るい声を投げる。

「キャリーって、どう?」

いきなりだつたので少女は何のことが分からず首をかしげ、大きな瞳で千流を見つめた。

千流ははにかんで笑いながら、言葉を紡ぐ。

「……名前。ないんでしょ? 幸せを運ぶ人だから、キャリー。よくない?」

キャリーと名付けられた少女の表情が、喜々とした。

「有り難う」

「ん? んー、どういたしまして?」

キャリーはふわっと宙に浮いた。嬉しそうに笑つて。

「それじゃ

「うん。ありがと、キャリー。……ねえ、その袋の中、落とし物が

入ってるんでしょ？重くない？」

「だってこれが私の仕事だから」

「……そつ、か。ま、返したくなつたら返してくれていいからさ。

たまには迷うこと、だつて必要だろーしね」

千流の言葉に返事をせず、ただ笑顔だけを浮かべて少女は消えた。
仕事が終わつたからだらうか。

「幸せ、ねえ……案外、近くにあるものなのかも」

冬の空から、白く冷たい贈り物が降り出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4382a/>

幸せを運ぶひと。---Happy Carry Girl is Lucky---

2010年10月15日22時48分発行